

本門の大導師

武蔵野のよいところは、何処からでも富士山のみえることである。

大聖人より、相承をうけた日興上人は当然のごとく、大聖人の葬儀の後、その御遺骨を抱いて、日興門下の衆徒を引きつれて、身延に向われた。

今、真正面に富士山がみえる。昨夜は武州池上を発して、戸塚の宿の近く、境川の畔りがのぞめる。飯田の宿にとまり、今日は箱根の湯本に宿をとる予定で早朝に出立したのである。

箱根連山の上に大きな富士がみえる。日興上人は、かかえておる御遺骨を少しばかり仰むけて、富士山がようくみえるようにした。

「日蓮一期の弘法、白蓮阿開梨日興に之れを付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てられるば、富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法とは是れなり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり

弘安五年九月 日

日蓮判

血脈次第

日蓮日興

一

これが、日蓮大聖人より、日興上人に相承され御相承の内容である。日興上人は常にこの文々句々を暗誦せられて、この御相承の精神は手や足の節々までもしみこまれておられる。そしてそれは、大聖人なき後の大聖人の弟子檀那の先頭にたつところの、本門弘通の大導師であると言う御自覚であった。時に日興上人は三十七歳である。意気最も盛んで大導師にふさわしい年齢ではないか。

今富士山に向つて、相州の大地をふんまいて、大聖人の御遺骨を奉持して行く足どりもしつかりしておるのも不思議ではない。

今日興上人は、大聖人の御遺骨を奉持して身延に向つておるのは、大聖人さまが、「いづくにて死に候とも、墓をば身延の沢にせさせ候べく候」

と御遺言があつたからである。だが、日興上人は本門弘通の大導師たるべしと、大聖人から御遺命があつた。そして、大導師たるべきものの使命は、富士山に本門寺の戒壇を建立すべきことである。

今前方にみえる富士、本年の初雪をいただいて山頂が白く輝やく富士、彼処に本門寺の戒壇を建立すべしとの大聖人の御遺命である。御遺命ををなされた大聖人は薪尽火滅して、今は御灰骨になつて、日興上人の両手に奉持されておる。

日興上人は、今富士をみながら、思はず両の手に力が入つた。

此の御灰骨は身延に向い、今夜は箱根の湯本、明日は箱根の車返しと、予定がきまつておるが、大聖人の眞の御魂のおちつく所は、身延ではなくて、富士本門寺の戒壇であるべきである。

これは一体どうしたことであろうか。しかし仏法には不思議はない。凡べてが因縁所生であるべきである。必ずや、この大聖人の御灰骨が、富士に向うべき因縁の起る日があるのである。

それは何時だかわからないが、きつとその日が来るのである。善き因縁によつて富士に向うか、悪き因縁によつて身延を去るのか、それはわからないが、その日があつて、富士山に本門寺建立の基礎が出来るのであらう。

「日本無雙の名山、富士に隠籠せんと欲すると雖も、檀那の請いによつて、今此山身延山に籠居す、我が弟子の中に本門寺の戒壇の勅を申し請うて、戒壇を建んと欲せば、須く富士山に築くべし」

これも大聖人の御遺命である。今本門弘通の大導師たるべしと決心せられた、日興上人にとつて、富士に向つて一日中歩く、この武蔵野に続く相州の旅路に大聖人の御灰骨を奉持しながら格別な思いにふけられるのは当然のことであつた。

大聖人なき後の法華講衆はどうなることであらうか。法華講衆がどうなるかはまだまだ後でよい。それを率いて行く、大聖人の弟子の側に変化はないだらうか。大聖人の御在世中は、法難は大聖人に直接おしかかつてきていて、弟子と称して、大聖人と運命を共にすると言つても、直接

ではなく常に間接であった。だが、大聖人が遷化せられた只今からは事情は一変したのである。法華経を旗標（はたじるし）として、南無妙法蓮華経唱えるところの法難は、今度は直接に、大聖人の御弟子と称する者におしかかってくるのである。これを押しかえす所の充分な力が弟子達にあるだろうか。法難を受けても、それを押し返すだけの功德を積んでおれば押し返すことが出来るであろう。だが、大聖人の弟子全部がそのような徳をそなえているだろうか。

国難を前にしては「妻子眷属を思うことなかれ、権威をおそるることながれ、今度生死の縛をきつて仏果を遂げ給え」と言うきびしい指導をなさった大聖人さまである。この指導も大聖人さまがおればこそ出来た指導である。大聖人なき後にこのようなきびしい指導をすることが可能であろうか。だが、不可能であっても、本門の大導師たるべきものは、敢てこの指導をしなければならぬ運命にあるのだ。誰にでも出来るというものではない。汝は我が法をよく興すであろうと言うことで、日興という名を賜わったという、日興上人こそ、本門の大導師としてこの任に堪えることが可能なのである。

日昭上人は第一番の御弟子と数えられておるが、大聖人より年齢も一つ年上であり、大聖人さまの御命もあつて、大聖人が折伏の一面を持せられたのに反して、いつもいつも摂受の面をもたれて、守る方を受もつておられた。大聖人がなくなつたからと言って、急に積極的になろうと言うことはむづかしい。あくまでも大法を守るといふ方に力をいれて貫いたものである。進むことの

み知って、守ることを怠ったならば、全き法戦ということはお出来ない。日朗上人はどうであろうか。大聖人さまから一番可愛がられたお弟子であるが、情操が豊かすぎて折伏の大將軍たるには少しばかり欠ける所がある。日向上人は、日頂上人は、日持上人はと考えると、折伏の大将としては欠けるところがある。日興上人は大聖人が伊豆の伊東に流罪された時も、佐渡三か年の流罪の生活にも、常に大聖人に給仕奉公してその真心を捧げておられた。

大聖人が身延と池上において御相承をなされたことは当然のことであつた。そして大聖人なき後の日興上人は、本門の大導師にふさわしい行動をとられたが、おのずから日昭上人日朗上人日向上人日頂上人日持上人等々と断然ことなる路をとられるようになったのは勿論のことであつた。

今大聖人の御遺骨を抱いて、相模の光る海をみながら、箱根の湯本に向つて歩いておる、日興上人であるが、立正安国論の一節を思い浮かべると、思わず、御灰骨を捧持する、両手に力が入るのだった。それは、

「去ぬる元仁年中、延暦興福両寺より、度々奏聞をへ、勅宣御教書を申し下し、法然の選択の印板を大講堂にとり上げ、三世の仏恩を報ぜんが為に、之を焼失せしめ、法然の墓所に於ては、感神院の大神人に仰せつけて破却せしめ……」

云々の個所である。五十五年前の安貞元年六月二十四日大谷廟所において群集によつて法然上人の墓所が荒らされたことがある。浄土宗側では之を否定して、その前日に遺骨を他所に移したと

伝へ、望月仏教大辞典でも、六月山徒、源空の墓所を毀たんとす、と書いて事件は未遂のように思えるが、立正安国論は幕府に献上した上書である。偽がある筈がない。しかも、事件は安国論献上の年から考えると三十四年前である。これはこの事件に関しては、立正安国論は確実なる文献ということが出来る訳である。日興上人が、大聖人の御遺骨を捧持してこのことを考えて、今後の御灰骨に対するに、どのように嚴重に御守護すべきかを考えたのは当然なことである。

法然上人がその墓所を何故破却せられたかと言うことは、

「念仏者、追放せしむる宣示、御教書、五篇に集別する勘文状」（全集八六ページ）「念仏無間地獄抄」（全集一〇三ページ）等に詳細に述べられておるから省略する。

元久二年（一二〇五）の十月に、興福寺側に源空以下の処罰を願った九箇条が提出されたが、興味ある処を拾つてこれをあげると、新宗を立つるの罪、神明を敬せず、諸宗を嫌つて同座に及ばず、等々を罪科としてあげている。その外「困碁雙六はしてもよい、女犯肉食は往生を妨げず、末世の持戒は市中の虎なり」等々を源空の罪科としている。

これらの罪科というものを、よく吟味して大聖人の教えをのべようとすれば、困碁雙六等々の類は別として、それに全く触れないということは出来ないものである。だが、(一)新宗をたてること、(二)神明を敬せず、(三)諸宗を嫌つて同座せずというこの三か条も、なんとか理由をつけて、言いのがれが出来るであろう。またその理由を勘え出して圧迫をのがれることが出来るであろう。だがただ

一つなんとしても、言い逃がれ出来ぬ重大な一事がある。それはなんであるか。

南無妙法蓮華經

である。

南無妙法蓮華經

と唱えることである。

法然上人はその専修ということで圧迫を受けたのであるが、なおその唱えことは念仏であった。念仏とは思うことであると思うのは日本人の考えかたで、中国語辞典では(一)声を出して読むの意である、と思うの意味は四番目に掲げてある。念仏とは仏は阿弥陀仏のことで、阿弥陀仏の名号を唱えることである。

法然上人は諸宗から圧迫されて、墓になつてからでも、乱暴されたが、その称名においては同一の南無阿弥陀仏であった。仏は同じように阿弥陀仏であり、ただその修行の方法が違ふと言うだけである。

だが、

南無妙法蓮華經

と唱えることは、これはまるつきり違ふのである。だからこそ、

「日蓮一人南無妙法蓮華經と唱え始めたり」

と言われたのである。

南無阿弥陀仏というは阿弥陀仏と念ずる、阿弥陀仏と唱えるから念仏である。だが南無遍照金剛と唱へ南無観世音菩薩と唱えても仏を念ずるのであるからこれも凡べて念仏なのである。だが、南無妙法蓮華経と唱えるのは念仏とは言わない。妙法蓮華経と唱え南無するのだからこれは強いて言えば、念法と言うべきである。念仏と全く違うのが南無妙法蓮華経であり、これはかくすことが出来ない。大聖人所蹟の大御本尊を拝すればわかることである。釈迦多宝も諸仏諸菩薩も、みな南無妙法蓮華経から生れてきたことを示されておる。「南無妙法蓮華経は三世の諸仏の父なり母なり」とは、このことを言われたのである。「南無妙法蓮華経の五字をば当時の人々は名とばかり思へり、さにては候はず体也、体とは心にて候」とあるが、南無妙法蓮華経は諸仏諸菩薩の心なのである。だから、念仏とは数段すぐれたものが、南無妙法蓮華経である。南無妙法蓮華経を唱えるだけで折伏になるのである。大聖人が、「末法に入つて今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異り自行化他に亘りての南無妙法蓮華経なり」と言われたのはこれをさすのである。

南無妙法蓮華経と唱えることは折伏することであり、折伏を怠つて南無妙法蓮華経と唱えることは自語相違なのである。

だが、大聖人なき後の大聖人の弟子檀那が果たして、如何になつていくのか。今日興上人は、大聖人の御灰骨を捧持して、相模の草原を歩いている。日興上人は力強い声で、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

と唱えた。日興上人に従う、日興上人の弟子である日目、日秀、日仙、外に南条次郎の一行も思わず、日興上人の声に和して、

南無妙法蓮華經

と唱えるのであった。

ゆく手に大きな富士がみえる。

